私の戦争体験記

同窓会会員：植地　勢作

投稿日：平成 27 年 9 月 22 日

私は昭和 15 年 12 月 17 日に生まれた。太平洋戦争（大東亜戦争）が始まったのは翌 16 年 12 月 8 日である。そして 20 年 8 月 15 日に戦は終わった。私は戦中派と呼ばれるが、ゼロ歳から 5 歳までの戦争体験であるので、世に言われるような戦争の記憶はない。

私が生まれ育ったのは、紀伊半島の南端に近い七里御浜という風光明媚な海岸線をもつ町（阿田和）である。世界遺産に指定されている熊野古道の一部である。私の家はその海岸線から 1 里ほど山奥に入った山の中腹で、遠く熊野灘が見え、海が荒れた日には波音が響いてくるところにあった。私の育った集落には樹齢 1500 年を超える大きなクスノキがる。「日本の巨木 100 選」に数えられている。このクスノキは危うく伐採されそうになったとき、南方熊楠が柳田国男に頼んで切られずに済んだという曰くがある。

私の戦争体験は「竹槍訓練」で始まる。小学校の校庭で、割烹着を来た母が大勢の人たちと竹槍訓練をしていた。割烹着の白さがまぶしかった。敵が七里御浜へ上陸してきたとき相手を突き倒すためだと言っていた。

私の兄は小学校 4 年で亡くなった。破傷風である。小学生のことであり、軍事教練があったとは思えないが、スパルタ教育が行われていたようである。倒れても倒れても立ち上がらされ、気が付いた時は手遅れであった。亡くなる前に新宮市にある病院に見舞いに行った。「勢作は来るな！」と叫んだ兄の声は今も忘れられない。もっと生きていたかったのだろう。兄も戦争犠牲者であった。兄を死に至らしめた先生は一度も見舞いに来なかったと母は言っていた。

飛行機の爆音が遠く聞こえてくると、私たちは父が作った防空壕に慌てて入った。防空壕はじめじめしていた。あるとき飛行機が上空を舞い始めた。伯母が田圃で焚火をしており、それが見つかったためのようであった。みんな、さんざん文句を言いながら焚火を消していた。

夜、爆音が聞こえてくるといつも電灯に黒い布をかぶせ、じっと息をひそめていた。

このころになると B29 の音が識別できるようになっていた。遠くから B29 の音が聞こえてくると急いで防空壕に入るのが習わしであった。以来、プロペラ機の音に対する恐怖感が消えず、爆音が聞こえてくるといつも恐怖におののいた。この恐怖感が消えたのはジェット機の時代に入ってからである。

戦争が終わった日のことは記憶にない。

南方の戦線に従軍していた父方の叔父が帰ってきた。リヤカーに乗せられて歩くこともできない叔父は、これこそ骨皮筋エモンかと思うほどやせ衰えていた。酒の好きだった叔父はどんなに酔っぱらっても亡くなるまで戦争のことは一言もしゃべらなかった。

母方の叔父は 3 人戦死した。叔父の一人は戦争が終わっても生きていたらしい。後に、帰還した人から母が聞いた話では、ミンドロ島にいた叔父は終戦の報を聞いた後ジャングルに入っていったという。ある晩、家の下のほうにある母方の家から「慎一（叔父の名）が呼んでいるから来てくれ」と叔母が呼びに来た。私は両親とともにその家まで下りて行った。床下から何か声が聞こえていた。

そして、しばらくして火の玉が飛んで行った。みんなで、「いま、慎一が亡くなった」と語り合った。

戦争が終わっても統制経済は続いていた。わが家は幸いなことにお米は供出するほどあったので困りはしなかったが、魚の配給のたびにリヤカーの来る下の道まで下りて行った。クジラはいやというほど食べた。クジラのおかげでたんぱく質の補給ができたといえる。グリーンピースがクジラの捕獲を巡って相変わらず太地町の捕鯨を叩いているが、私は腹が立ってしようがない。自分たちの一方的な価値観で私たちの食文化を破壊してほしくないものである。

あるとき、祖母に連れられて井田という隣村の「田掻き大会」を見に行ったときである。山を越えていくと隣の集落の田圃に大きなすり鉢状の穴が開いていた。爆弾を落とされた跡である。連合軍は大阪や名古屋を襲撃した後、残った爆弾を落として帰って行ったので、山火事はしょっちゅうであった。こんな爆弾に直撃されたら防空壕なんてひとたまりもないと改めて思った。

昭和 34 年に大学に入るために上京した。食堂で食事をしようと思ったら外食券がないと食事をさせないという。これには参った。そんなものは一度も見たことはないし、必要だと考えたこともなかった。東京には敗戦の跡がまだ残っていたのである。

私の戦争の記憶はジェット機時代の幕開けとともに次第に薄くなっていった。

以上